



伊勢のごせんぐう

伊勢神宮 内宮(ご鎮座二〇二〇年奉祝行事)

伊勢の木遣り^{きや}で奉祝^{ほうしゅ}しましょう。

内宮(皇大神宮)のご鎮座二〇二〇年にあたり、この秋、奉祝事業を行う計画を進めております。ご記憶の方も多いと思いますが20年前には、ご鎮座二千年という大きな節目として地域をあげて記念事業が行われました。今回は単独の催しとなりますが、伊勢の民としてご神徳への感謝を込めて、奉祝の意を表したいと考えます。

活動主軸として、先人の敬神の心からその歴史がはじまった「お木曳、お白石持行事」という民俗行事の保存伝承を大きな柱としている当委員会としては、内宮において、木遣りの披露をもつて奉祝行事を執り行いたいと考え、現在実施に向け、企画立案と各団の調査を進めています。

内宮参集殿での木遣り披露となりますので、この機会に各団のご参加をいただきたいと考えています。秋の実施をめざして、各位ご協力いただけますよう、お願いいたします。

開催(予定)

日時 平成28年 9月25日(日)

場所 内宮参集殿能舞台



上の写真は、平成25年お白石持行事時のイメージ写真です

伊勢の木遣り

一般に木遣りは古くから、木材の伐出しなどの労働唄として唄われたといわれています。いわゆる音頭取りが全員の気持ちを統率するために、また、一同が力を出し尽くして「休みする」ような場合に用いられました。

伊勢の木遣りは、お木曳の時や、祝儀歌として神事のおめでたい時に唄われ、また、伊勢音頭のルーツのひとつだともいわれています。室町時代に御木を奉曳するときに木遣り唄が唄われていたという記録があるので、お木曳の歴史とともに、伊勢に伝えられてきた独自の文化といえるでしょう。

その伝えられている歌詞は地域の特色を詠み込んだり、時代に合わせて作り替えたり、流行唄の文句を巧みに取り入れるなどの遊びの要素も多く、また奉曳団ごとに節回し、衣裳、演出などに違いがあり、地区ごとにも特徴があるなど、ひとくくりにできない興味深いものです。



昭和初期撮影 木遣り
(写真提供/小川町奉曳団)

奉祝

伊勢神宮のはじまりである二〇二〇年前の伊勢は、どんなところだったのでしょうか。おそらく、現在ある道や人工物がないのはもちろん、人もたくさんは住んでいなかったでしょう。おそらく今とは少し違うかもしれませんが、空には太陽が昇り、重なる山々、深い杜から川が流れ出て、ほどなく海へとつながる、そんな豊かな

せん。当時、五十鈴川は、現在の二見町の方に大きな流れがあつたといえますから、二見の海岸から清流を遡り、ぐるりを豊かな杜に包まれた神様をお護りするにもふさわしい、現在の内宮の場所を鎮座地として選んだ：倭姫命の歩いた道を想像してみると、なんとなく合点がいくところがあります。倭姫命の巡幸の物語が記された歴史書『日本書紀』によると、伊勢の地に至り、天照大御神のお告げがあつたとされています。

今年は、内宮(ご鎮座二〇二〇年

自然は変わりがないことは想像できます。

内宮(ご鎮座)を定められたのは、倭姫命という十二代垂仁天皇の皇女とされています。当時、都は奈良にあり、皇祖神天照大御神を祀るにふさわしい場所を探すよう命を受けた倭姫命は、奈良から巡幸の旅に出ました。いくつもの土地に滞在してそこで神を祀ることや米作りなどを伝えながら、よりよき地を求めて大和、伊賀、近江、美濃、そして伊勢へ：そうして十四もの巡幸地を経て、現在の伊勢に着いたとされています。

都からみて東の果ての海。倭姫命は、二見の浜にたち、海から日が昇るのをみただしうか。まさしく太陽の神様が鎮まるにふさわしい地、と考えられたのかもしれない

「この神風の伊勢の国は、常世の浪の重浪よする国なり、傍国のうまし国なり。この国に居らむとおもふ」

：伊勢の国は神風が吹き、常世(神々の世)からの波が打ち寄せる、やまとの果ての素晴らしい国であるから、ここにいたい

「うまし国、伊勢」それは二千年前から、そして今もこの地を表す言葉として使われています。倭姫命の伝説以上に大切なのは、確かに伊勢神宮が都から遠く離れたこの地に作られ、伊勢は神宮とともに歴史を重ねてきたということです。美しく豊かな「うまし国」に生まれたことの喜び、神宮とともに生き続ける民として誇りをもつて、内宮(ご鎮座二〇二〇年)を奉祝したいものです。



神宮の森より伊勢市街を臨む(平成25年撮影)

